



私の保育ノート

保育と育児

私は、四歳児、五歳児の担任として幼稚園に十二年間勤務し、現在は育児休暇を頂いて、一歳の息子の育児をしています。今までとは全く違う、息子と過ごす時間の中で、保育者としての考えを振り返ったり、親としての葛藤を感じたりするようになりました。これまでの保育で大切に思ってきたことや、育児の中で感じていることを、保育者としてだけでなく、親としての気持ちを変えながら、考えていきたいと思います。

保育者として憧れの姿

私が保育者として憧れとしているのは、学生の時に実習をさせていただいた、大学の附属幼稚園の先生方の姿です。

ある日、ホールで遊んでいた数人の五歳男児の間でトラブルが起こりました。一人の男の子が担任の先生を呼びに来て、一緒に解決することになりました。先生も一緒に積み木に座り、子どもたちと肩を並べて、子どもたちの気持ちに共感しながら解決しようとなさっていました。また、子どもたちも、先生に

依田奈津子

(幼稚園教諭)

依田奈津子（よだなつこ）
幼稚園教諭。現在、育児休暇中。

解決してもらおうと必死に訴えるのではなく、「自分たちで何とかしよう」と、文字通り首をかしげながら、一生懸命考えていました。

私は、こんなふうに、子どもたちの気持ちに共感し、「自分（たち）で何とかしようとする意欲」を育てられる保育者になりたいと思います、保育を続けてきました。

赤ちゃんの意欲

息子はまだ一歳になったばかりですが、この一年間、赤ちゃんの「意欲」に驚かされるばかりでした。特に教えられるわけではないのに、自ら体をひねり、寝返りをする。腕を使ってずり這いを始め、腰を上げてハイハイをし、お座り、つかまり立ち、ひとり立ち、ひとり歩きと、どんどんできるが増えていきます。生まれてたった一年間で、「この意欲はどこから？」と思うほどの成長を見せて

くれました。人間は生まれながらにして「やってみたい」というものすごい「意欲」を持っていることに、改めて気付かされました。

この生まれながらの「意欲」を失わず、さらに伸ばしていけるよう、実習先の幼稚園の先生のように、共感したり、見守ったりするかかわりが大切であると改めて感じました。

親としての葛藤

ところが、そのことがわかっていても、心配になったり、周りの目が気になったりして息子の行動を抑制してしまっていることがあります。特に、一歳を過ぎ、何となく友達とかかわるようになると、好奇心から友達のおもちゃを取ったり、悪気はなくても洋服を引っ張ったりしてしまうことがあります。息子がおもちゃを取られても、「世の中うまくいかないことも

あるよ。良い経験！」と思ってるのに、息子の乱暴に見える行動に対しては、気が気ではありません。保育者としての自分とは違う姿の、親としての自分に気付かされました。

親としてと育児者として

正直なところ、テレビのドラマやワイドショーの影響か、「ママ友は怖い」「ママ友づくりは大変」というイメージが強く、約一年前、三か月になったばかりの息子を連れて初めて地域の子育てサロンに行ったときには、とても緊張しました。

しかし、地域の子育てサロンには、子育て経験のあるスタッフがいて、優しく声を掛けてくれ、初めてのママでも溶け込みやすい雰囲気をつくってくれています。また、同じメンバーが継続して参加し、仲良くなりやすいようなプログラムも用意されていました。私はそのプログラムに参加し、息子が一歳にな

った今でも毎月集まれる「ママ友」、そして息子の初めての友達ができました。いろいろな話をするうちに、互いの子どもの性格やママの育児に対する考えも知ることができ、その友達の間では、子ども同士の間で起こる些細なトラブルも、見守ることができるようになりました。

地域によって違いはあると思いますが、子育てをする親をサポートしたり、ネットワークづくりを推進してくれたりする取り組みは、とても充実しているように感じます。その環境を生かして、親子でいろいろな場所へ出かけ、赤ちゃんのうちからたくさんの人とふれ合う機会をつくることで、親も子どもも、人とかかわり方、親と子のかかわり方を学んでいけるのだと思います。

保育者としてと育児者として

幼稚園で子ども同士のトラブルがあったと

きには、保育者として、保護者にもそのとき
の状況や子どもたちの思いを説明し、子ども
たちにとってトラブルやその解決法を経験し
ながら学んでいくことの大切さを伝えてきた
つもりでした。しかし「わが子が生まれてか
ら幼稚園に入るまでいろいろな経験をしてき
た保護者の気持ちに寄り添っていただろうか」
「幼稚園での姿だけを見て話をしていなかった
だろうか」と今になって反省しています。

けれども、逆に考えれば、幼稚園で初めて
その子どもと出会う保育者は、入園時や進級
時のフレッシュな印象が強く残っています。
そのため、そこからの成長を強く感じるこ
とができます。赤ちゃんの時期の目に見える急
速な成長ではない、子どもたちの日々の心の
成長の様子を、保育者が保護者へ、具体的に、
継続的に伝えていく大切さを改めて感じてい
ます。

これから息子が大きくなっていくにつれ
て、保育への思いや親としての思いは、また
変化していくかもしれません。「保育者として
保育すること」と「親として育児すること」
は、当然全く違うことですが、一人ひとりの
子どもを大切に思い、幸せに生きていつてほ
しいと願う気持ちは同じだと思っています。その
気持ちを大切に、保育者としても親としても、
子どもと向き合っていきたいと思います。

私の恩師が「子どもは三歳までにすべての
親孝行をしてくれる」とよくおっしゃってい
たことを思い出します。一歳のかわいい息子
と過ごす時間は、今まで感じたことのないよ
うな、何とも言えない幸せな時間です。育児
休暇を頂けたこの時間に感謝し、保育者とし
て復帰のときまで、もうしばらく、「息子から
の親孝行」をしっかり受け取り、これから先
の保育と育児の力にしていきたいと思ひます。